



辞書を編む

飯間浩明著

光文社 2013 (光文社新書)

文学部教授 野口 武悟

多くのみなさんにとって、“本”は「読む」ものとして認識されていることだろう。この冊子も「教員がすすめる読めば読むほど味のでる本」と副題にあるように、やはり、「読む」ための“本”を紹介している。

しかし、“本”のなかには、「調べる」ために作られた“本”も存在している。例えば、国語辞書や百科事典、図鑑などである。こうした“本”のことを図書館では、“レファレンスツール”と呼んでいる。“レファレンスツール”は地味過ぎて、ややもすると忘れられがちであるが、みなさんの学習や日常生活には欠かすことのできない存在である。

“レファレンスツール”が地味な存在であることは、作り手である出版界のなかにおいても同じである。だが、地味といっても、そこに否定的なニュアンスは含まれない。なぜならば、出版社にとって、“レファレンスツール”は一度出版されれば、安定的に売れ続ける類いの商品だからである。

こうした地味な“レファレンスツール”の1つである国語辞書がどのように編纂されているのかを紹介しているのが、飯間浩明著『辞書を編む』（光文社新書635）（光文社、2013年）（以下、本書）である。著者の飯間さんは、『三省堂国語辞典』の編纂者（編集委員）の1人であり、本書ではこの『三省堂国語辞典』を例にして国語辞書の編纂プロセス（編集方針、用例採集、取捨選択、語釈、手入れ）が具体的に詳しく語られている。本書を「読む」ことで、“レファレンスツール”の想像以上の奥深さに魅了されること間違いなしである。将来、出版界を目指したい学生には、特にお勧めしたい。

なお、本書のタイトル『辞書を編む』は、三浦しん著『舟を編む』（光文社、2011年）を意識しているという（本書、p.265）。『舟を編む』は国語辞書の編集部を描いた小説で、2013年には映画化もされた。『舟を編む』も、本書とあわせて読んでほしい1冊である。